

国立民族学博物館春期特別展「千家十職×みんなづくり：茶の湯のものづくりと世界のわざ」

著者	八杉 佳穂
雑誌名	起風
巻	15
号	2
ページ	36-38
発行年	2009-04-15
URL	http://hdl.handle.net/10502/4613

展覧会紹介・13

国立民族学博物館

春期特別展

「千家十職×みんなばく」

茶の湯のものづくりと世界のわざ」

会期 平成二十一年三月十二日(木)～六月二日(火)

三月十二日から六月二日まで、千里万博公園にある国立民族学博物館（通称民博）で、「千家十職×みんなばく・茶の湯のものづくりと世界のわざ」展を開催しています。この展覧会は、千家十職の方々に、民博所蔵の民族資料を見ていただいて、そこから新しい作品を制作してもらうことを中心に据えたものです。

民博は創立以来、三十有余年経ちます。その間に世界の諸民族が生活のために作りだしてきたものを二十

六万点ほど収集してきました。それは世界の民族や文化を説明するために必要と考えてきたからです。その豊富な資料を研究だけでなく、創作のためにも活用したい。その思いを千家十職の方々にお話ししました。まさか実現するとは思いませんでしたが、それは千家十職の方々も同じだったようです。信じられない展覧会ができてしまいました。

茶の湯の世界ではスーパースーパーブランドの千家十職も、民族学の世界ではほとんど知られていません。そのため、まず千家十職とは何かを説明することから展示は始まります。露地や水屋の一部を再現して、そこに十職が作ったものを配置しました。茶室で使う道具だけでなく、茶の湯の道具全般を作ってきた人々たちであることを理解してもらうためです。

千家十職は三百年から四百年を超す歴史を持ち、当代で、十一代から十七代を数えます。二つめのコーナーでは、その長い歴史と伝統を、歴代の逸品を展示することで表わすことにしました。

茶の湯という日本の伝統文化で鍛え上げられた目と手が、民博の所蔵品に出合うとどのようなものを選び、

新しいものを作るのでしょうか。それが三つめのコーナーです。出番のないまま収蔵庫に眠っている資料を揺り起こして、創作するために、十職の方々は何度も何度も収蔵庫に通いました。そしてモノたちに触発され、これまでにない作品を作りました。ひらめきの源になった民族資料と、そこから生まれた作品が、職家さんが気に入って選んだものとともに展示されています。

世界の見え方は、それぞれのものもつ経験や文化によって異なります。目の前にあるものの中から何かを選ぶとき、その基準は人によってさまざまです。世界中から集まった民博にある資料の中から十職の方々が選んだ資料には、これまでの西洋中心的な美の基準から見ると、美しくないものがあるかもしれません。でもじっくり見ると、それぞれが何かを語っているようです。それは彼らの魂に語りかけたからに違いありません。だから選ばれたのでしょうか。美とは何か、用とは何かを問いかけ、創造の源泉が民博にもあることを示す新しい試みです。

民博の展示場は、一階と二階にわかれています。一階では、千家十職がこれまで作ってきた作品とともに、

民博を見て、選び、生みだした作品が展示されています。それに対して、二階は民博が十職に応えた展示です。十職の仕事は手仕事です。民博に収蔵されている品のほとんども手仕事です。そこで手の動きを展示に利用することにしました。叩く、鑄こむ、捏ねる、削る、描く、塗る、張る、組む、曲げる、切る、縫うの十一個の動詞を選び、それぞれの動詞の間に十職の仕事を表わす作品などを展示しました。そしてそれぞれの動詞をもとに、民博の所蔵品から選んだものを展示しました。

たとえば叩くを取りあげてみましょう。十職で「叩く」仕事は鍛金とか彫金などの仕事をする金物師中川淨益氏です。ところが叩くをキーワードに、世界に比べると、タパのように樹皮を叩いてできる布や、土を叩いて作る土器があります。スチール・ドラムは、金属を叩いて作った上に、叩いて演奏します。このように、同じ動詞でも、材料や文化が異なれば、違うものが生まれます。十職の仕事を動詞で世界に拡げることが、手仕事のおもしろさや人間の多様性が実感できる展示です。

千家十職の仕事は、釜師、茶碗師、袋師などの名前が示すように、家ごとに決まっています。そして利休好みや家元好みの型や寸法を伝承して、いつでも必要に応じることができる家です。家元と十職の関係は、王家と御用達のような面を持っています。それをミヤンマーのパンセミヨと比較することで示しました。パンセミヨ（「花十種」）とは、漆器工芸やろくろ工芸、鍛冶などの伝統工芸を伝承する、いわばミヤンマーの十職です。この人たちは、共同で何かを作ったり、作品を持ち寄ってひとつのまとまった作品に仕上げることはないようです。しかし千家十職は、共同でひとつのものを作ったり、茶箱のように、それぞれの作品を合わせてひとつにすることがあります。これも大きな特徴です。

今回の展示に合わせて、民博の正面にある日本民芸館では、「茶と美―柳宗悦・茶を想う」展をしています。また日本庭園内では、特別記念お茶会が開かれます。お得な共通券もありますので、ぜひお越し下さい。

（特別展実行委員長 国立民族学博物館教授 八杉佳穂）

・口絵―ページ

会場 国立民族学博物館 特別展示館
開館時間 午前10時～午後5時
(但し入場は午後4時半まで)

休館日 毎週水曜日(4月29日・5月6日は開館)・
4月30日(木)・5月7日(木)

入館料 一般 六〇〇円(五〇〇円)
高校・大学生 三五〇円(二五〇円)

小・中学生 一五〇円(一二〇円)

※常設展込み。()内は団体・前売り料金。
※毎週土曜日は小・中学生及び高校生無料。

5月5日(火・祝)は無料観覧日。自然文化園を
通行して来館される場合は自然文化園の入園料が
必要です。

住所 大阪府吹田市千里万博公園10-1
連絡先 TEL:06-6876-2151

HP <http://www.minpaku.ac.jp/special/senke/>

●特別記念お茶会

日時 武者小路千家担当・5月9日(土)・10日(日)
午前10時～午後3時半

会場 万博記念公園の日本庭園内茶室「汎庵」
料金 八〇〇円

※席数に限りがあります。詳細はHP、情報企画課

TEL:06-6878-8532まで。

●三施設共通入場券についてのご案内

国立民族学博物館(千家十職×みんぱく)・茶の湯のものづくりと世界のわざ)・大阪日本民芸館(茶と美―柳宗悦・茶を想う)・日本庭園に入ることができます。

一般・八〇〇円、高校・大学生・五〇〇円、小・中学生・二五〇円、二日間有効。前売り券あり。